

二〇二〇年中国オンライン学会参加報告

佐藤 信 弥

はじめに

昨春以来コロナ禍の中で対面形式による学会の開催が困難となる中で、各学会はオンライン化を模索してきた。無論中国関係の学会も例外ではない。筆者は二〇二〇年十一月に中国古文字研究会、東アジア文化交流学会、日本秦漢史学会大会と、国内外の三つの学会でオンライン発表を行なった。本稿ではこのうち中国の大学が開催校となった中国古文字研究会と東アジア文化交流学会について、その開催の様子や試みについて報告することにした。

一 中国古文字研究会第二十三届年会

(一) 学会の概要

中国古文字研究会は中国の学会であり、かつ甲骨・金文などの古文字・出土文献学の分野の代表的な学会である。設立は一九七八年、文革後に結成された最初の学会である旨側聞している。学会の開催ペースは、近年は二年ごととなっており、西暦の末尾一桁偶数年の十月頃に開催されている。それに合わせて会誌の『古文字研究』が発行され

る。学会の開催校は中国国内の大学の持ち回りである。

今回参加・発表した第二十三届年会の開催機関は、河南省開封市の河南大学の関係機関、黄河文明与可持续发展研究中心、甲骨学与汉字文明传承发展研究中心、文学院（文学部）である。開催日程は受付とエクスカージョンも含めて二〇二〇年十月三十日～十一月二日である。筆者が参加申込書を入力した経緯は、本誌第八号掲載の拙稿「世界漢字学会第七届年会参加報告」を参照。

この学会で発表報告を行うことが筆者の研究者人生の目標であったこともあり、コロナ禍の中で無事に開催されるかどうかやきもきしていたが、結局「シロコシヤンエンシシフヂョウホーファンシ一線上線下相结合方式」による開催が決定した。すなわちオンライン形式とオフライン形式（対面形式）の結合による開催である。中国国内在住の研究者は会場に足を運んで発表し、筆者のような外国人研究者はオンライン形式で発表ということになる。

この学会は留学時代にお世話になった教員や同級生たちも多く参加し、再会を楽しみにしていたので、オンラインという形でしか参加できないのはかなり残念であった。ただ、同級生たちとは微信（WeChat）の学会専用グループチャットを通じてアカウントの交換をし、オンラ

イン越しに久闊を叙することができた。第八号で紹介した世界漢字学会と同様、この学会でも微信が活用されている。

(二) 学会当日の様子

発表報告は十月三十一日と十一月一日の二日間に渡って行われ、一日目の午前中が開会式と基調報告、同日午後から二日目の夕刻までが発表報告で、最後に閉会式が行われるという流れである。発表報告は甲骨組・金文組・簡帛組・総合組の四グループに分かれ、発表時間は一人十五分、コメントーターは設けておらず、各グループの総合討論などでコメントが行われる。筆者は二日目の午前中に金文組で「韓伯豊鼎銘与西周時期王命記録的变化」という題目で中国語による発表報告を行った。学会のプログラムによると、基調報告も含めて計百二十三名による発表報告が予定されていた。使用言語は中国語のみである。

この学会では中華書局発行の会誌『古文字研究』が会議論文集（予稿集）も兼ねており、市販もされている。ただ論文投稿締切が開催の一年以上前とかかなり早く設定されていることもあり、学会参加申請や投稿が間に合わないなどの事情で掲載に至らなかった発表者（実は筆者もそのひとりである）のために、別途会議論文集が用意されている。しかし今回オンライン発表者にはこの会議論文集は配布されていない。後日PDF版を配布予定ということであったが、結局配布されなままとなっている。なお、筆者の報告論文については開催機関の紀要に投稿中である。これは微信で河南大学側の関係者（世界漢字学

会第七周年会参加報告」に登場したM氏とのやりとりで案内された。

対面発表者は会場の開元名都大酒店の会議室で報告を行った。この学会では、開催校の校舎ではなく、参加者の宿泊するホテル（中国の学会では参加者の宿泊するホテルが指定されるのが一般的である）の会議室で発表報告等を行うのが通例のようである。動画越しに様子を窺うと、対面参加者の多くがマスクをしないようであった。感染拡大がかなりの程度抑えられていることにより、屋内ではマスクは必ずしも必要ないということなのであろうか。

オンライン発表者は中国版のZoomトランスクリプティとも言うべき騰訊会議（ Tencent・ミーティング）によって参加する。外国人の場合はその国際版であるZoomを使用する。Zoomと操作感はそれほど違いがないが、接続はZoomより重く不安定である。こちらのネット環境上の問題もあるのだろうが、発表者の共有するPPTが表示されなかったり、なかなか切り替わらないという問題がおこった。筆者の発表でもPPTが相手側にちゃんと届いたか不安になった。更に接続の安定性は、発表者の所在地や回線によってムラがあるようである。オンライン発表者がファイルの共有を設定できず、音声のみの発表となったり、オンライン発表者が定刻になってもアクセスしないといったトラブルも発生した。

今回の学会では対面発表とオンライン発表を別のグループに分けるのではなく、同じグループで適宜織り交ぜるという方式が採られた。オンライン発表者は我々外国人だけでなく中国人研究者にも多く見られた。留学時代の教員、同級生たちに事情を聞いてみた所、防疫上の

観点により大学から外地（他の省）に出張する許可が下りないというケースもあったが、それよりも校務など他の事情で会場に行けないというパターンの方が多いようである。コロナ禍が収まっても、中国での学会では今後「線上線下相結合方式」が定着していくことになるのであろう。

また、技術的な問題点も目に付いた。特に開幕式の中継では学会の運営側が慣れていないせいも、映像がぼやけ、音声もくぐもってはつきり聞こえなかった。この点はチャットでも同様のクレームが複数書き込まれていたため、ネットの接続状況は直接関係しないものと思われる。最後の閉幕式の中継では、この種の問題がおおむね解決されていた。ただ音声に関しては発表報告の後の総合討論でも同様の問題が発生し、オンライン組は置いてけぼりで対面発表者のみで討論が進められたのは、当方としては不満が残る所である。

なお、中国国内でも Zoom は使用可である。同じく十一月に日本で開催された第三十二回日本秦漢史学会大会では、中国在住の日本人研究者が Zoom によって発表報告を行っていた。ただ、中国国外から VoV を使用する場合は逆に、中国からの使用は音声途切れたりと、接続がやや不安定になるようである。騰訊会議がオンライン発表のツールとして採用されているのは、接続の安定性に加えて、Zoom の無料版での使用時間やアクセス人数の制限が影響しているようである。

二 第十二回東アジア文化交渉学会

(一) 学会の概要

東アジア文化交渉学会は、日本の関西大学を中心に二〇〇九年に設立された国際学会であり、その名の通り「文化交渉」をキーワードとしている。毎年五月頃に年次大会が開催され、毎回全体テーマが設定される。開催校は日本、中国、台湾、韓国など、東アジア地域を中心とする各国の大学の持ち回りとなっている。また機関誌として英文誌の *Journal of Cultural Interaction in East Asia* を発行している。設立趣旨やこれまでの年次大会については学会ホームページを参照¹⁾。機関誌に掲載された論文等もホームページから PDF が閲覧・ダウンロードできるようにしている。また藤田高夫による前年の第十一年次大会の報告にもこの学会の紹介がなされている²⁾。

第十二回大会の全体テーマが「文化交渉媒質としての漢字・伝播と影響」であり、漢字と漢籍の伝播などについて議論を行うということで、筆者の所属先である立命館大学白川静東洋文字文化研究所を通じて学会の案内が寄せられ、参加申し込みをすることとなった。開催機関は河南省鄭州市の鄭州大学漢字文明研究中心、開催日程は受付等も含めて二〇二〇年五月八日～十一日の予定であった³⁾。

しかしコロナ禍により二〇二〇年の春に開催の延期が決定され、当初の予定より半年後の二〇二〇年十一月八日に開催されることとなった。この学会でも微信で専用のグループチャットが設置され、開催延期の要請や開催時期の再設定など、学会の運営担当者同士の検討の様

子などがある程度オープンになっていた。そしてこちらでも線上線下相結合方式が採用されることとなったが、対面形式で行われるのは開会式と基調報告の一部のみで、発表報告はオンライン形式のみである。使用されるミーティング・アプリはやはり騰訊会議及びVooVとなる。

(1) 学会当日の様子

当日の午前中に行われた開会式と基調報告については、騰訊会議だけでなくBilibili（ビリビリ動画）でもライブ中継された。中国版のニコニコ動画のようなものであるが、今や本家を圧倒するような存在となりつつある。こちらは日本からのアクセスでも接続が不安定になることはなく、画質・音声とも良好な状態で視聴することができた。

その後は分科会での発表報告となる。筆者は午後の中で「殷周間における祭祀関係文字の継承」という題目で報告を行った。日本語による報告である。国際学会ということで、日本語、英語、中国語、韓国語など各国語での発表報告が可能となっていた。学会のプログラムによると、発表者は基調報告やグループ発表も含めて計百六十八名が予定されていた。なお、こちらの学会では会議論文集が事前にPDF形式で配布された。

今回の大会の全体テーマと、開催機関である鄭州大学漢字文明研究中心が文字学の分野の研究者を擁していること、分科会の小テーマのひとつとして「漢字の発展史と伝播史」が設定されていること、過去の年次大会で古文字・出土文献学の分野の研究者が発表報告を行っていたことにより、この分野の報告もそれなりにあるものと期待してい

た。しかしプログラムを確認すると、漢籍、あるいは近現代の文化交流や語学・文学に関する報告が多数を占め、古文字・出土文献学分野の報告は筆者を含めて二つしか存在しない。正直かなり場違い感を覚える学会となってしまった。

筆者は午後からの日本語による発表者のグループで発表報告を行うこととなった。発表者の多くが日本語のできる中国人研究者で、報告内容については近現代の語学や思想などに関するものが目立つ。二〇二〇年は前述の中国古文字研究会など複数の学会での発表報告を予定していたので、日本語による報告を選択した。これも失敗のひとつで、横着せずに中国語で報告を行うことにすれば、もう少し適切なグループに配当されたかもしれない。

同時にこのグループでの前半部の司会も担当することになった。中国時間で一四時一〇分～一八時〇〇分（日本時間では一五時一〇分～一九時〇〇分）まで、およそ四時間かけて十二人の研究者が報告を行うことになる。長丁場となるが、後半部は別の人が司会を割り当てられているので、取り敢えず約二時間頑張ればよいと考えていた。ひとりひとりの発表時間の設定は司会の裁量に任せられるということだったので、取り敢えず頭割りでひとりあたり発表報告を十五分程度、質疑応答を四～五分程度に設定した。

しかし多くの発表者が質疑応答の時間も食い潰して報告を行うので、質疑応答の時間があまり取れなかった。また中国古文字研究会と同じく、定刻になってもアクセスがない発表者や、接続の不具合により報告を後回しにして欲しい旨要望する発表者が現れた。困ったこと

に後半部で司会を担当予定だった方もそのひとりで、お陰で筆者が後半部の司会も請け負うことになってしまった。

そう言う筆者も接続の不具合から強制的にミーティング・ルームから退出させられてしまい、再度入室したり、ある方の報告が終わって次の発表者への案内のために音声をミュートからオンに切り替えようとしてもなかなかオンにならず、発表者から「佐藤先生？佐藤先生？」と問いかけられ、微妙に不審がられるという一幕もあった（居眠りしていたと思われるのだが……）。この学会では閉会式がなく、午後の部の終了をもって閉会となった。

おわりに

中国では現在学会だけでなく、学術講演会や講座などもオンライン化が進められており、騰訊会議や *hidivi* によって聴講が可能なものが多くなっている。国外からは却ってコロナ禍以前よりもオープンな状況になってきているとすら言えるだろう。反面、今回の参加記で触れたように対面参加者とオンライン参加者との双方向性に問題を残している。この点は日本のオンライン学会の方が気を遣っているようである。一方で微信によるグループチャットの活用については、日本の学会でも LINE を活用して同様の試みができないかと思う。

そして当漢字学研究会でも今年から「線上線下相結合方式」による実施を進めている。国内外でのオンライン学会参加の経験をどの程度生かせるか模索中である。

※ 本稿は「二〇二〇年秋季オンライン学会参加記」の題で『中国史料研究会会報』第十号（二〇二一年一月）に発表した報告を修正したものである。

注

- (1) <http://www.sciea.org/>
- (2) 藤田高夫「東アジア文化交流学会第十一年次大会に参加して」『東方学』第一四〇輯、二〇二〇年。
- (3) 第十二回大会の詳細については <http://www.sciea.org/meeting12> を参照。

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 客員研究員）

